『正親町帝時代史論―天正十年六月政変の歴史的意義―』第七章（岩田書院、2012年）

**「桶狭間の戦いと東西複合国家体制」**

はじめに

一　東西複合国家体制と今川義元

二　長尾景虎の京都防衛

三　二つの古戦場

四　秀吉の今川領侵入

おわりに―上洛への道と義輝弑逆

桶狭間の戦い年表

※（『郷土文化』第６５巻第一号、名古屋郷土文化会、2010年）

本論文は、織田信長と室町幕府の関係について、その起点が桶狭間の戦いに始まるとの趣旨から『郷土文化』で発表後、博士論文の参考論文として提出し、一部補筆して発刊している。

《要約》

従来、桶狭間の戦いは、典型的な奇襲作戦とされていたが、戦略論の観点、そして室町時代を通じて、京都と関東に同様の組織が独立的に並立する東西複合国家体制であったという基本的な歴史認識から、これまで解析されていなかった。

この戦いの本質は、将軍と三国同盟を背景とした関東の公方との東西対決であり、代理戦争であった。信長は、この戦いに勝利することで、幕府の信任を得て天下人への道が開かれた。

1. 義元の戦略については、非上洛説もあるが、準備と規模から認めがたいとした有光友學氏は、この開戦が、一年延期されているとした。本論は延期の理由が、長尾景虎が永禄二年に春から秋まで越後の精兵を率いて上洛していた事実によるとした。信長は、幕府と連携し、景虎を動かすという構図がある。
2. 義元上洛の背後に、関東公方足利義氏と北条氏康がいた。武田晴信も三国同盟に加わり、景虎をけん制している。
3. 信長は、村木城の戦いで示されたように、後詰に諸国の軍を入れ、自軍の総動員を可能にして、義元を迎え撃つ戦略を創出した。
4. 『春日禎一郎文書』により、義輝は信長への後詰を諸国に命じたが、朝倉と六角の軍勢が、斎藤義龍の非協力によって美濃で立ち往生し、救援できなかったことが判明した。
5. 完全ではないが、諸国からの加勢を受けて織田本隊は優勢となり、今川本隊を引き込んで包囲殲滅した。義元本陣は孤立し、信長は予備兵力である自身の小姓や馬廻に命じて突撃させた。『信長公記』の記事は、この最終局面の記録である。
6. この戦勝を受けて、義輝は、義氏と氏康に対して景虎に報復攻撃を命じ、十万の兵で景虎は小田原城を攻囲したが、果たせなかった。義輝は、義氏の後任に義弟の関白近衛前久を考えていた。
7. 秀吉の出自は、石井進、服部英雄両氏の研究により被差別層であったことが、明らかになっているが、その理由は織田氏の情報戦略と今川氏の戦略物資である皮革の慢性的な不足に関連し、今川領からの帰還後、秀吉が「おさなともだち」として信長の小姓と同じく、出世していった事実にも符合する。
8. 関東の脅威が去り、景虎の関東制圧も失敗すると、義輝と三好・松永の勢力との暗闘が再開し、義輝は信長に上洛を命じるが、三好・松永の両者は、機先を制して義輝を弑逆する。信長は大義名分を失い、上洛を断念する。